

和泉・塔塚古墳出土遺物報告（2） —新規収蔵品の銅鏡を中心として—

馬淵一輝

I. はじめに

本論は大阪府堺市浜寺に所在する塔塚古墳から出土した銅鏡2面を報告する。塔塚古墳の調査記録、出土した鉄製品・埴輪は前号で報告されており、あわせて参照願いたい。

塔塚古墳は近畿最古級の横穴式石室をもつと古くから指摘されており、学史的にも重要な古墳である（森・田中1960）。前号の検討では、鉄製品と埴輪の年代観はTK208期を中心として、古墳時代中期後半の器物が多数を占めることが示された（浜中ほか2020）。市教委調査分の埴輪と副葬品の年代観に大きな齟齬は無く（十河2003）、塔塚古墳の築造時期は5世紀第3四半期とみておきたい。一方、今回報告する銅鏡2面はともに西晋鏡と考えられ、主に3世紀後半の製作年代が想定できる。第1主体部の横穴式石室とは異なる第2主体部（南櫛）からの出土ではあるが、塔塚古墳の築造年代と時間的な隔たりが大きい。本論では塔塚古墳出土鏡の基礎的な位置づけをおこなうとともに、塔塚古墳の周辺に存在する古墳から出土した銅鏡にもふれつつ、若干の考察をおこないたい。

II. 大阪市立美術館旧保管出土遺物の報告

2019年5月、同志社大学歴史資料館は所有者より、塔塚古墳から出土した遺物である銅鏡のほか若干の鉄製品（馬具、鉄鏃等）と石製・ガラス製装飾品（勾玉・管玉等）が寄贈された。これらの遺物は大阪市立美術館に保管されていた。本論では銅鏡のみ報告する。なお、前号の報告で、田中英夫氏のノートに基づいて位至三公鏡を鏡1、方格八乳鏡を鏡2とする番号がつけられており¹⁾、本報告でも踏襲する（浜中ほか2020）。現在の研究状況から、名称のみ「位至三公鏡」を「双頭龍紋鏡」に、「方格八乳鏡」を「方格T字紋鏡」に改めた。

鏡1 双頭龍紋鏡 図1・写真図版1～3

出土状況 棺の東寄りに鏡面を上にして副葬されていた。鏡の上下や周囲に玉類が散乱していた。

現状 完形品。X線写真をみると鈕の周囲に若干の亀裂がある。僅かに赤色顔料とまだらに赤みがかかった褐色の土が鏡面と鏡背に付着している。縁や鏡面はにぶい白銀色の地金が観察できる。鏡全体を濃緑色の錆が覆い、鏡面と縁は錆膨れが目立つ。

法量 直径9.0cm、厚さは内区が1mm、外区が2mm、鏡面の反りは3mmである。重量81gである。

紋様・形態 鈕の断面形態は、頂部からやや下がった位置で傾斜角度が変化し、尖頭形となる。鈕孔は整った長方形である。もう一方の鈕孔は周囲が凹んでいる。鈕は段をもたず、鈕座は突線がめぐ

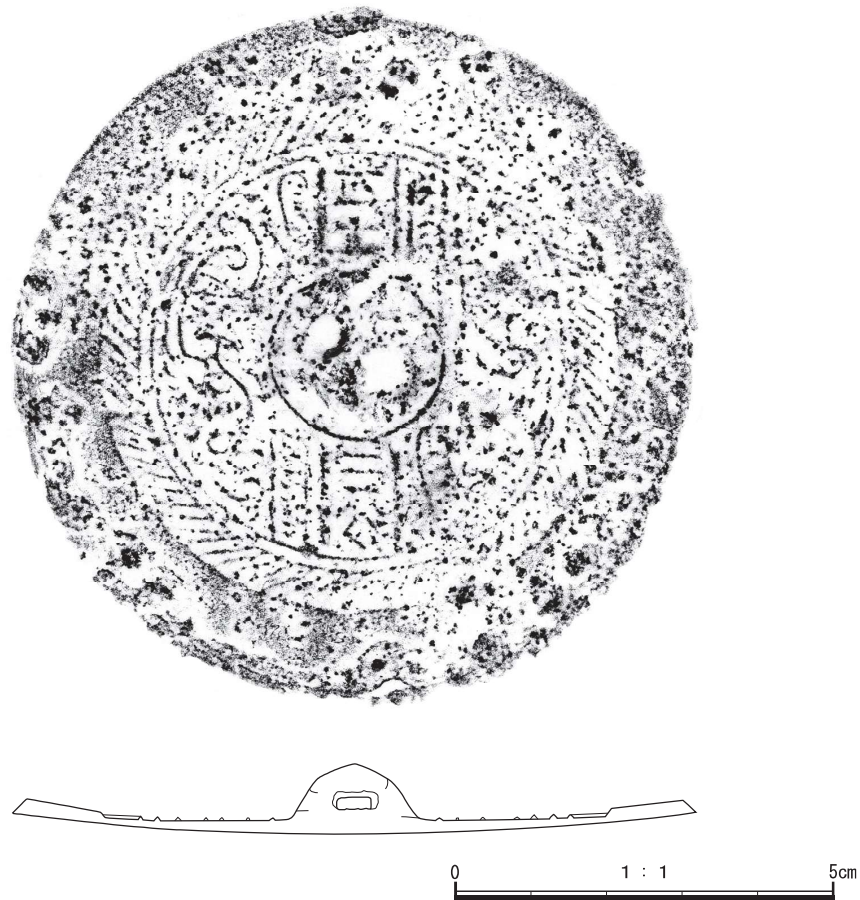


図1 双頭龍紋鏡(鏡1)

内区は太めの突線で、縦3区画に分けられる。鈕を含む中の区画は銘帯で、左右の区画は紋様を施す。銘帯は鈕を挟み上下に分けられ、上に「至」、下に「三公」の銘をもつ。通常は「位至三公」であり、本鏡は「位」を脱落する。「至」は縦に長く、「公」の「ム」の部分を書き。左右の区画は、ともに細い突線で双頭龍紋が退化した紋様を配す。頭部が退化した部分はM字を縦に引き伸ばし、間に短線紋を充填した紋様に相当する。上部銘帯の左、下部銘帯の右に位置する。頭部を置かない上部銘帯の右と下部銘帯の左は銘帯の突線に沿うように弧状の短線を並べる。体部が退化した部分は全体がS字状を呈し、中ほどで扇形紋様が上下に1つつく。体躯の頭側に鋭角の三角紋がつく。残りの空間は渦紋を充填する。内区紋様は左右の区画で、鏡の中心を基準に点対称となる。

内区外周は突線と反時計回りに斜行する櫛歯紋がめぐる。内区と外区を分ける段にほぼ差はない。

外区は素紋で、縁は平縁である。傾斜する縁端面をもつ。縁端は鋭い。

鑄造・研磨 全体に良く鑄出されており縁端も鋭さを留めているが、X線写真をみると外区に鑄巣が目立つ。「至」字下側の鈕座が大きく鑄崩れる。図の1～3時方向の内区と櫛歯紋帯、図の4・5時方向の内区に湯引けが発生しており、紋様が模糊としている。図の7・8時方向の縁は別の部分より薄く、縁端の傾斜も急である。湯引けと縁の情報から、この位置に湯口が設けられていた可能性があ

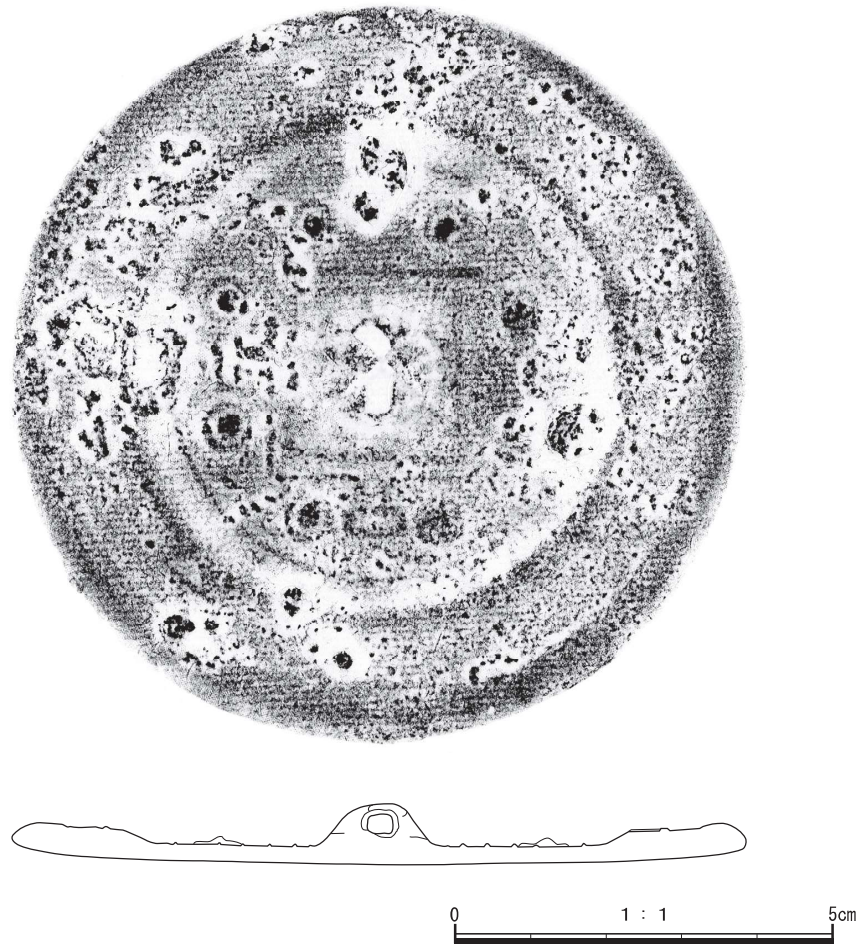


図2 方格T字紋鏡（鏡2）

る。

研磨や摩滅は銹のため観察できない。

位置づけ 一般的には「位至三公鏡」という名称で知られる鏡式だが、西村俊範氏の研究に従い双頭龍紋鏡として報告する（西村1983）。双頭龍紋鏡のうち最も退化した型式である西村氏の分類Ⅲ式に相当し、後漢代に既に出現していたとされるが、西晋代に盛行した型式とも考えられている（徐1984）。また、森下章司氏の検討によって華北地域に分布することが示され、華北系の鏡として認識されている（森下2007）。

鏡2 方格T字紋鏡 図2・写真図版1～3

出土状況 槨の中央やや東寄りに鏡面を下にして副葬されていた。鏡1とは異なり周囲に別の遺物は散乱していない。

現状 完形品。X線写真をみると鏡を縦断する亀裂がみえる。鏡面の一部に赤色顔料が付着している。鏡全体にまだらに褐色の土が付着している。鏡背はにぶい白銀色の地金がよく観察できる。鏡背の縁

を中心に部は鮮やかな緑色の錆がつき、黒色錆もみえる。鏡面は全体を濃緑色の錆が覆う。鏡面と鏡背の一部に重い錆膨れがあり、細片がはがれていく。

法量 直径9.7cm、厚さは内区が2mm、外区が4mm、鏡面の反りは3mmである。重量160gである。やや厚手である。

紋様・形態 鏡背の紋様は全体に模糊としており、観察が難しい。

鈕は頂部がやや平坦で、扁平な鈕である。鈕孔は正方形に近い。もう一方の鈕孔は上辺が鈕の中ほどまで大きく凹んでいる。鈕は極僅かな段をもつ。鈕座は方格をもつが、方格内側の紋様の有無は判別できない。

内区はT字形紋様と左右に配置した2つの小乳で、4つの区画に分けられる。L・V字形紋様はもたない。主紋はほとんど観察できないが、図の7・8時方向に4・5条の細線で表した紋様があり、鳥紋が退化した紋様と考えられる。図の6時方向のT字紋外側にも2・3条の細線がみえる。乳は低い半球形を呈すが、十分に鑄出されていないものが多い。

内区外周はほとんど無紋の状態に近く、内区の地と異なる鑄肌をもつ。一部に間隔が広く、荒い楕歯紋帯がうっすらとみえる。内区と外区を分ける段は非常に緩やかである。

外区は内区と同様に、図の7・8時方向にうっすらと幅広で鈍角の鋸歯紋がみえる。外側の紋様は判別できない。ただし、鋸歯紋のまわりをめぐる突線が観察できるため、複線波紋を配した可能性が高い。縁端は丸みを帯びている。

鑄造・研磨 鏡背の紋様はほとんど鑄出されておらず、鑄造当初からこのような状態であったと推察される。図の3～6時方向の範囲は湯引けが著しい。図の11時方向は縁が薄く、この位置に湯口が設けられていた可能性がある。

乳頂や縁の一部に光沢があり、光沢のある部分の鑄肌は地と異なり凹凸が少ない。したがって、ある程度の摩滅が想定できる。なお、方格やT字紋は突線で表現されるのみで、突線の間には研磨はみえない。

位置づけ 本鏡式は方格規矩鏡が退化したものとして認識されている。松浦有一郎氏によって「方格T字鏡」としてまとめられ、面径が分類指標となっている(松浦1994)。森下氏の分類では丁群に相当し、西晋代に製作されたと考えられる(森下1998b)。

III. 塔塚古墳出土鏡の類例と評価

塔塚古墳から出土した2面の銅鏡は、双頭龍紋鏡と方格T字紋鏡であり、いずれの鏡も西晋代に製作されたと考える。ここでは、類例鏡との比較から鏡の詳細な位置づけをおこなう。

双頭龍紋鏡・方格T字紋鏡の研究略史 先ず、製作年代と製作地にかかわる研究にふれておきたい。

双頭龍紋鏡は、西村氏が内区と外区の紋様の組合せから3式に大別している。主紋様の退化と出土遺跡の検討から、I式は後漢中期に、III式は後漢後期の2世紀後半に出現していたとみる(西村1983)。一方で、徐萃芳氏は双頭龍紋鏡のうち新しいもの(西村氏のIII式に相当)を「位至三公鏡」と呼び、出土墓葬の時期を基に、魏代に出現し西晋代に流行したとみる(徐1984)。こうしたIII式の

年代観の開きは現在も一致していない（森下2006）。近年、上野祥史氏はⅡ式にある稀有な銘文が三角縁神獸鏡の銘文と共通することを主な根拠に、Ⅱ式を魏鏡に位置づけた点はⅢ式の年代観ともかわる²⁾（上野2016）。製作地について、双頭龍紋鏡の出土が華北地域に偏ることは従来から指摘されてきたが（樋口1979、西村1983、徐1984など）、森下氏は実際に出土地を検討し「華北系」として位置づける（森下2007）。

方格T字紋鏡は、松浦氏が面径によってM式（15cm前後）とS式（11～9cm）の2つに大別しており、出土が北部九州に集中することから、当地で製作された仿製鏡として認識する（松浦1994）。後に、魏晋鏡の実態が判明してきたことで、西晋鏡へ位置づけが変更された（森下1998b、車崎1999・2002）。森下氏は魏晋方格規矩鏡を甲～丁群へ4群の変遷観を提示し、丙・丁群が方格T字紋鏡に相当する（丙群はM式、丁群はS式と対応）（森下1998b）。近年、方格T字紋鏡丙・丁群が大陸で1面も出土していないことを重視し、列島製と再評価する見解もある（徳富2017・2019）。しかし、方格T字紋鏡が北部九州に集中する現象は、方格T字紋鏡と同時期に流通した倭製方格規矩鏡との比較から解釈されることも多い。下垣仁志氏は、畿内は大型の倭製方格規矩鏡が流通しており、小型の方格T字紋鏡は周縁部に分布する結果とみる（下垣2003b）。上野氏も両鏡式の流通原理の差とみる（上野2004）。

以上、製作年代と製作地にかかわる議論をまとめた。次に、報告した2面の類例を挙げ、詳細な位置づけをおこなう。

塔塚古墳出土双頭龍紋鏡の類例 塔塚古墳から出土した双頭龍紋鏡は細線表現に統一されており、Ⅲ式に位置づけられる。本鏡の大きな特徴は、銘文を「至三公」とする点である。同様の銘をもつ例は北京市密雲区12号西晋墓（北京市文物研究所ほか2019）、河南省宜陽県石村郷馬朝溝村（霍・史主編2013 172）、四川省金堂県十里村崖墓³⁾（龔2018）、小校経閣金石文字掲載鏡2面（劉1935 16-26・27）である（図3-1・2）。いずれの鏡も似た内区紋様をもつ。退化した龍紋の頭部の位置にS字状の紋様を代わりに置く点は珍しく、これら類例鏡の特徴といえる。塔塚古墳出土鏡は龍頭表現をもつ点ではこれらの類例と異なる。また、「位至三公」銘となるが、全体の構成が類似する鏡も存在している（図3-3）（霍・史主編2013 170など）。同型・同範鏡は確認できていない⁴⁾。

魏晋鏡にみえるS字紋は唐草紋や芝草紋と呼ばれ、三角縁神獸鏡の時期比定に活用されてきた背景をもつ。そのため、類例鏡にみえる芝草紋についてふれておきたい。類例鏡のなかでも、宜陽県出土鏡がもつ芝草紋は五島美術館蔵景元四年（263）銘芝草紋鏡の紋様と類似する（図3-4）（五島美術館学芸部編1992 73）。非常に単純な紋様であり、異なる視座からの検討も必要であるが、実年代を推測する材料と成りえるだろう。

塔塚古墳出土方格T字紋鏡の類例 塔塚古墳から出土した方格T字紋鏡の面径は9.7cmであり、丁群（11～9cm）に位置づけられる（森下1998b）。本鏡の大きな特徴は鈕座に紋様をもたない点である。ほとんどの方格T字紋鏡は面径の大小にかかわらず鈕座に方格規矩四神鏡由来の十二支帯、もしくは十二支を省略した小乳をおく。同様の紋様構成で、本鏡と面径に近いものは佐賀県横田下1号墳（径10.3cm）（大園1977 52）や徳島県巽山古墳（径9.3cm）（斎藤ほか編1962）などを挙げられる（図3-5・6）。方格T字紋鏡は同型・同範鏡が存在しているが、本鏡の同型・同範鏡は確認できない。



図3 塔塚古墳出土鏡の類例

(1：河南省宜陽県石村郷馬朝溝村、2：小校経閣金石文字16-27、3：河南省洛陽市612所地下車庫9884号西晋墓、4：五島美術館蔵M026、5：佐賀・横田下1号墳、6：徳島・巽山古墳)

製作年代と製作地の評価 以上、塔塚古墳から出土した銅鏡2面の研究史と類例をみてきた。製作年代・製作地ともに議論の余地があるが、双頭龍紋鏡は西晋代に華北地域で、方格T字紋鏡も西晋代に製作されたと考えておく。方格T字紋鏡の製作地については不確定な要素も多いが、ここでは双頭龍紋鏡と同様に華北地域で製作されたとみておきたい。次に問題の整理も含め塔塚古墳からこれらの鏡が出土した意義を考察したい。

IV. 銅鏡からみた浜寺四ツ塚古墳群の評価

鏡の製作年代と古墳の築造年代は大きな隔たりがあり、おおよそ100～200年の伝世期間があったと考えられる。2面とも小さな鏡ではあるが、長期保有された鏡であるといえよう。このような鏡を入手した塔塚古墳の被葬者について考察する。また、塔塚古墳が所在する浜寺四ツ塚古墳群から出土した鏡を検討し、百舌鳥・古市古墳群の出土鏡との比較や、ほかに初期横穴式石室から出土した鏡と比較することで、当時の鏡をめぐる諸問題に言及したい。

西晋鏡の流入時期と保有地 文献において、3世紀中葉の卑弥呼の遣使から、5世紀前葉の倭の五王の遣使まで、いわゆる「空白の4世紀」が存在する。また、4世紀の中国は騎馬民族の流入による混乱した状況下であり、この間の列島と大陸は没交渉であったともいわれる。しかし、3世紀後半を中心に製作された西晋鏡は、古墳時代前期後葉～中期前葉（4世紀後葉～5世紀初頭）以降の遺跡を中心に出土しており、「空白の4世紀」を越えて副葬された伝世品が一定数存在することは間違いない。双頭龍紋鏡はこの時間差を解消するために、早くから南朝への遣使と結びつけられた経緯がある⁵⁾（川西1983、東1990・1992）。近年、上野氏は双頭龍紋鏡を倭が5世紀に入手したと推測しており、直接大陸から手に入れたのではなく、楽浪・帯方故地から入手したとも想定している（上野2018・2019）。塔塚古墳から出土した2面の西晋鏡をめぐる状況も同様であることは述べておきたい。

塔塚古墳第2主体部の被葬者 それでは、こうした2面の鏡を入手した被葬者はどのような人物であったのだろうか。人骨と銅鏡の関係について下垣氏が整理しており、成果を参照したい（下垣2018）。性別と鏡式の関連性として、方格T字紋鏡は女性人骨にともなうことが多いと指摘する。ただし、鉄鏃や甲冑も共伴する事例があることから、この鏡式と女性人骨に相関性があるとは肯定的にとらえていない。一方で、性別と鏡の面径には有意な相関性を見出し、面径の小さな小型鏡（14cm以下）が女性人骨にともなう事例が多いと指摘する。したがって、小型鏡2面が副葬された塔塚古墳第2主体部は女性が埋葬されていた可能性が高い。第1主体部から鉄鏃と甲冑が出土しているにもかかわらず、第2主体部から出土していないことも示唆的である。人骨が残っていないので、第1・2主体部の被葬者間の関係を決定することは不可能だが、清家章氏の研究を参照すると二人はキョウダイ関係であった可能性が高い（清家2018）。

また、塔塚古墳は方墳に2つの埋葬施設をもつ。中心に第1主体部の横穴式石室があり、中心から外れた位置に第2主体部の南槨がある。前方後円墳を対象にしたものだが、複数埋葬の評価についても下垣氏が整理しており、成果を参照したい（下垣2011）。下垣氏は古墳時代中期前葉以降における前方後円墳の後円部複数埋葬を対象に、副葬鏡の分析をおこなっており、埋葬施設の格差と鏡の面径



図4 経塚古墳出土鏡（1：神頭鏡、2：四獣鏡、3：乳脚紋鏡）

の格差が相関関係にあると指摘する。塔塚古墳の第1主体部から銅鏡は出土しておらず前方後円墳でもないの、単純に参照することはできないが、埋葬施設の構造と位置、副葬品の質と量をみると第1主体部が優位といえるだろう。ただし、第2主体部は埋葬施設にアンペラを使用するなど、変わった特徴も持ち合わせていることなどは注意しておきたい。

鏡からみた浜寺四ツ塚古墳群と百舌鳥・古市古墳群 浜寺四ツ塚古墳群は塔塚古墳のほかに、経塚古墳、高月古墳群、赤山古墳が知られている。これらの古墳は、墳丘の規制（小野山1970）、双頭龍紋鏡の集中（森1978ほか）、特殊な埋葬施設の評価（川西2004）などで言及されたことがある。経塚古墳と高月2号墳から銅鏡が出土しており、簡単にふれておきたい。

経塚古墳は木棺2基から銅鏡5面が出土しており、全て倭鏡のようである（白石・設楽編1994、堅田2005）。確認できる範囲では、前期倭鏡1面（神頭鏡 前期中段階）、中期倭鏡1面（四獣鏡 近内4号墳出土関連鏡群 TK208段階）の伝世が認められるものと、後期倭鏡1面（乳脚紋鏡A系 TK23～47段階）の築造年代と差がないものが混ざる⁶⁾（図4）（下垣2003a、加藤2017・2018）。特に、長期間の伝世が見込まれる前期倭鏡と、古市古墳群の珠金塚古墳出土鏡に似る中期倭鏡が存在する点は注目できる。高月2号墳は礫床から銅鏡1面が出土しており、簡略化の進んだ双頭龍紋鏡である⁷⁾（森1951）。同じく古市古墳群の大鳥塚古墳出土鏡と類似する点は注目できる。

四ツ塚古墳群の築造順は塔塚古墳（中4期）、経塚古墳（後1期）、高月2号墳（後2～4期）と考えられ、さらに高月1号墳が続くようである⁸⁾。塔塚古墳は埴輪編年に基づき（十河2003など）、高月2号墳は出土した須恵器から判断した（森1951）。

浜寺四ツ塚古墳群出土鏡はどのような履歴をもつのだろうか。鏡は首長墓系譜に示される地域集団が保有していたと考えられてきたが（森下1998a、下垣2011・2013など）、王権による長期保有も起こりうる事が想定され（辻田2014、上野2015など）、近年は、王権で保有された鏡は一定数存在し、王権と地域集団の両者でおこなわれたと考えられている（加藤2015など）。各地域によって状況はさまざまであり、その都度検証しなければならないだろう。

浜寺四ツ塚古墳群の出土鏡構成の特徴を整理しておきたい。第一に、いずれの古墳も長期保有鏡を副葬している点である。これだけ長期保有鏡が集中する古墳群は珍しい。後にふれるが、長期保有鏡



図5 初期横穴式石室出土鏡（1：三重・おじよか古墳、2：和歌山・陵山古墳、3：福井・向山1号墳）

は「古い鏡」であって、それらが王権によって意図的に利用された可能性が指摘されている。浜寺四ツ塚古墳群が重視されていた材料となりえる。第二に、経塚古墳の異質性である。経塚古墳に限り倭鏡のみ副葬し、鏡と古墳の時期差が少ない鏡も副葬している。経塚古墳のみ墳丘が帆立貝式であり、こうした状況は墳形・規模と副葬鏡が関連していることを想起させる。また、これらの特徴ほど際立つものではないが、いずれも小型鏡であり、大型鏡や同型鏡を含んでいない点も注目できる。

浜寺地区周辺には弥生時代の集落である四ツ池遺跡が存在するものの、塔塚古墳築造以前に大きな古墳時代集落は確認されていない。その間に鏡を入手し、在地集団で長期間保有していたとは考え難い。4～5世紀に西晋鏡が列島へもたらされていた場合、入手主体は当時の王権であった可能性が高い。塔塚古墳の築造時点に全ての浜寺四ツ塚古墳群出土鏡が配布され、当地で保有されたか否かだが、経塚古墳出土鏡は先に述べた異質性から、塔塚古墳・高月2号墳出土鏡とは異なる状況であった可能性も考えられる。

初期横穴式石室の拡散と伝世鏡 塔塚古墳から出土した鏡を評価するうえで、同様の状況を示すそのほかの古墳もみておきたい。本州地域の初期横穴式石室から伝世した中国鏡が出土した事例を挙げる。いずれも県下最古の横穴式石室とされている。

三重県おじよか古墳（中4期）から魏晋方格規矩鏡丙群が出土している（図5-1）（志摩市教育委員会編2016）。築造時期も塔塚古墳に近い。おじよか古墳出土鏡はより伝世期間が長期にわたるが、最古の横穴式石室で魏晋鏡をもつという点で共通点が多い。和歌山県陵山古墳（中3～4期）から呉鏡が出土している（図5-2）（橋本市教育委員会編2019）。さらに伝世期間が長い鏡ではあるが、同様に共通点が多い。福井県向山1号墳（中3期）から出土した内行花紋鏡も西晋鏡の可能性が高い⁹⁾（図5-3）（花園大学考古学研究室編2015）。岡山県千足古墳など、本州地域にある全ての初期横穴式石室に中国鏡が副葬されるわけではないが、ほとんどの古墳で伝世鏡が副葬される傾向があることは認めてよいだろう。

横穴式石室の本州地域への拡散には朝鮮半島と北部九州の交渉を反映していると考えられ、窓口は有明海北岸地域が想定されている（鈴木2011）。沿岸地域に沿った初期横穴式石室の展開と副葬品について、橋本達也氏は「おそらく埋葬されている人物間にネットワークがそれぞれある」と想定して

いる(橋本2018P.34)。鏡の検討からみても、畿内沿岸部に位置する初期横穴式石室はそれぞれ三国西晋鏡を副葬する点が共通しており、被葬者の身分や役割などが類似していた可能性を想起させる。

新たな鏡秩序と伝世鏡 古墳時代中期末～後期初頭における鏡秩序は、同型鏡群を頂点として、倭鏡は面径の大小による格差づけが復元されている(上野2004、辻田2012・2018など)。こうした新たな秩序へ転じる中で、辻田淳一郎氏は古墳時代前期末における福岡県の初期横穴式石室を検討し、福岡県丸隈山古墳などに「古い鏡」が副葬されたことを指摘する(辻田2011)。さらに、塔塚古墳の類例鏡に挙げた横田下1号墳は王権によって長期保有された可能性があることを指摘し、5世紀前半の北部九州の上位層に鏡以外にも含めた「古い時代の器物」による被葬者の正当化がなされたとみる(辻田2014)。こうした状況を「伝世された前期倭製鏡や三角縁神獸鏡などの「古い鏡」が効果的に利用された」と述べる(辻田2018P.382・383)。上野氏は伝世した三角縁神獸鏡は「王権の保有を由緒として新たな価値が生まれ、古墳時代中期に帯金式甲冑とともに王権から三角縁神獸鏡などの中国鏡が配られた状況を考えておきたい」と述べる(上野2015P.140)。両者とも長期保有鏡に新たな価値を求める。

長期保有鏡の検討は重ねていかなければならないが¹⁰⁾、浜寺四ツ塚古墳群や初期横穴式石室から出土した鏡は何らかの意図を反映した事例といえよう。利用された長期保有鏡が一部に存在する可能性は考えてもよさそうである。小型鏡であっても伝世している場合は面径による格差づけに適応されない可能性もありうる¹¹⁾。同型鏡群や複数の大型鏡を副葬する古墳にはおよばないが、ある程度の有力者に配布されたのではなかろうか。

小結 塔塚古墳出土鏡の検討を起点として、古墳時代中期後半以降の銅鏡について言及した。小型鏡であっても塔塚古墳第2主体部の被葬者はそれなりの地位にあったと考える。塔塚古墳を含む浜寺四ツ塚古墳群を築造した集団は王権から重視されていたのだろう。塔塚古墳の被葬者達は北部九州や朝鮮半島に通じるネットワークを担当したことが想定できる。浜寺四ツ塚古墳群は、墳丘規模は小さいものの、変わった埋葬施設や伝世鏡が多く、非常に興味深い地域といえる。

V. おわりに

以上、論点が多岐にわたってしまったが、それだけ塔塚古墳がもつ意義は大きいといえる。

塔塚古墳出土鏡は伝世した鏡であって、第2主体部の被葬者は女性の可能性が高く、第1主体部の被葬者とはキョウダイ関係が高いことを指摘した。伝世の場所や入手の時期は特定できなかったが、本州における初期横穴式石室出土鏡をみると、塔塚古墳の被葬者は汎列島的な動きのなかで本鏡を入手したと考えられる。長期保有という価値が付加された鏡をもつことを主な根拠に、浜寺四ツ塚古墳群の被葬者が百舌鳥・古市古墳群を形成した王権に重視されていたことを想定した。近年、初期横穴式石室の調査報告書の刊行が続いており、塔塚古墳の報告もなされた。横穴式石室の伝播が明らかになりつつあり、これから議論が深化されていくだろう。特に、朝鮮半島と北部九州とのつながりは、鏡の視点だけでは到底明らかにできるものではなく、横穴式石室の構造や鉄製品、馬具の評価も踏まえて議論が深化されるだろう。

最後に、本論の執筆にあたって疑問に感じた点を示しておきたい。双頭龍紋鏡と方格T字紋鏡を同

時に観察し、検討を進めたが、同じ小型西晋鏡であっても製作技術や分布が大きく異なる。この違いは何を示すのだろうか。双頭龍紋鏡については別稿を準備しており、これからも研究を続けていきたい。

謝辞

報告にあたり大阪市立美術館・同志社大学歴史資料館・浜寺元町公民館から格別のご高配を賜った。X線写真の撮影は元興寺文化財研究所の初村武寛氏のお世話になった。経塚古墳出土鏡の写真は吉田生物研究所の藤田秀臣氏からご提供頂いた。また、以下の方々から種々のご教示をえた。末筆ながら記して感謝申し上げます。

春日宇光 辻川哲朗 二村真司 浜中邦弘 浜中有紀 三浦悠葵

註

- 1) 鏡番号と鏡式の対応関係は辻川哲郎氏の註に従った(浜中ほか2020)。
- 2) ただし、岩本崇氏はⅡ式における主紋様の変化に長い時期幅を想定し(岩本2019)、久住猛雄氏はⅡ式を魏鏡とする場合、Ⅱ式が出土した福岡県町南遺跡で共伴する土器との年代に齟齬が生じるという反論がある(久住2019)。また、上野氏はⅢ式が早い段階で出現していた可能性も残している点では、Ⅲ式の年代観の問題は解決されていない(上野2016)。
- 3) 双頭龍紋鏡Ⅲ式が四川地域から出土する事例は非常に珍しく、おそらく本鏡が初出である。報告は蜀漢墓としており、双頭龍紋鏡Ⅲ式の出現年代を推定する重要な資料である。簡報に留まるのみで正式な報告が待たれる(龔2018)。
- 4) 魏晋鏡は同范鏡が多い。しかしながら、双頭龍紋鏡Ⅲ式に限っていえば、筆者の管見に及ぶ限りでは2組4面しか見つけることができなかった。
- 5) のちの両氏の論文では、双頭龍紋鏡が華北系の鏡で、かつ南朝墓から出土していないことを加味してか、双頭龍紋鏡が南朝への遣使でもたらされたという考えは改められたようである(川西2004、東2019)。
- 6) 括弧内に示した出土鏡の評価は前期倭鏡を(下垣2003a)に、中期倭鏡を(加藤2018)に、後期倭鏡を(加藤2017)に従った。
- 7) 高月2号墳出土鏡は別途、館報に報告する予定である。高月2号墳出土鏡は大鳥塚古墳出土鏡と紋様・铸造技術が類似する鏡で、大鳥塚古墳出土鏡は従来、双頭龍紋鏡の最末期型式と認識されてきた(樋口1979など)。紋様の簡略化が著しく、铸造も拙劣なことを主な理由とする。双頭龍紋鏡Ⅲ式との型式的な断絶が大きく、新しい型式であることは間違いなさそうである。
- 8) 本文中にある括弧内の時期区分は大賀克彦氏の時期区分を参考にした(大賀2002)。
- 9) 報告中では奈良県池ノ内1号墳出土鏡との類似性から後漢鏡の可能性が提起されているが、連弧紋の間に4つの珠紋を配したものは西晋代の内行花紋鏡によくみられる。面径と紋様構成から岩本氏の分類Ⅱ式に相当し(岩本2017)、西晋中期に製作されたと考える。
- 10) 両氏による伝世の解釈は王権による保有が前提となる。伝世の場所が王権・地域集団・大陸のどこにあるかで、伝世品に付加される価値は変わる。一部の西晋鏡の流入時期を5世紀とする場合、王権の保有による箔づけは薄れる。古墳時代を通じて、下垣氏が盟主墳に長期保有鏡(特に中国鏡)を副葬する現象があると指摘しており(下垣2013)、勢力の大小はあるものの、有力者が古い鏡を手に入れている傾向は認めてもよさそうである。
- 11) 筆者は粗雑で小型の魏晋鏡であっても、有力な古墳から出土することを指摘したことがある(馬淵2015)。伝世品であることが価値を高めると同様に、舶載品であることも鏡の価値を高めたのだろう。

参考文献

- 東潮1990「東アジア世界との交流 四世紀の国際交流」『古墳時代の工芸』古代史復元7 講談社 167-172頁
- 東潮1992「対外交流」『図解・日本の人類遺跡』東京大学出版会 188-191頁
- 東潮2019「魏志東夷伝の天下観—王畿の洛陽と東夷の邪馬台国—」『魏都・洛陽から倭都・邪馬台国へ—『親魏倭王』印の旅—』雄山閣 149-160頁
- 岩本崇2017「西晋鏡と古墳時代前期の暦年代—鳥根県古城山古墳の鏡と土器をめぐる—」『鳥根考古学会誌』第34集 63-77頁
- 岩本崇2019「伯耆国分寺古墳に副葬された鏡の履歴」『伯耆国分寺古墳の研究』鳥根大学考古学研究室調査報告第18冊 鳥根大学法文学部考古学研究室・伯耆国分寺古墳研究会 45-52頁
- 上野祥史2004「韓半島南部出土鏡について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集 403-433頁
- 上野祥史2015「鏡からみた卑弥呼の支配」『卑弥呼 女王創出の現象学』大阪府立弥生文化博物館 132-141頁
- 上野祥史2016「戸田小柳遺跡出土鏡について」『戸田小柳遺跡』かながわ考古学財団調査報告 315 306-311頁
- 上野祥史2018「古墳時代における鏡の分配と保有」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集 79-110頁
- 上野祥史2019「朝鮮半島南部の鏡と倭韓の交渉」『国立歴史民俗博物館研究報告』第217集 291-317頁
- 大賀克彦2002「凡例 古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書V 清水町教育委員会 1-20頁
- 加藤一郎2015「後期倭鏡と三角縁神獸鏡」『日本考古学』第40号 53-68頁（加藤2018・2020に改筆再録）
- 加藤一郎2017「乳脚紋鏡の研究」『古代』第140号 43-79頁（加藤2018・2020に改筆再録）
- 加藤一郎2018『後期倭鏡の研究』私家版
- 加藤一郎2020『古墳時代後期倭鏡考 雄略朝から継体朝の鏡生産』六一書房
- 川西宏幸1983「中期畿内政権論」『考古学雑誌』第69巻第2号1-35頁（川西1988『古墳時代政治史序説』塙書房に改筆再録）
- 川西宏幸2004『同型鏡とワカタケル—古墳時代国家論の再構築—』同成社
- 久住猛雄2019「二・三・四世紀の土器と鏡—土器の併行関係と出土鏡からみた暦年代を中心として」『銅鏡から読み解く2～4世紀の東アジア 三角縁神獸鏡と関連鏡群の諸問題』アジア遊学237 勉誠出版 214-229頁
- 車崎正彦1999「副葬品の組み合わせ—古墳出土鏡の構成—」『季刊考古学 前方後円墳の出現』別冊8 雄山閣 53-74頁
- 車崎正彦2002「三国鏡・三角縁神獸鏡」『考古資料大観』第5巻 小学館 181-188頁
- 下垣仁志2003a「古墳時代前期倭製鏡の編年」『古文化談叢』第49集 19-50頁（下垣2011に改筆再録）
- 下垣仁志2003b「古墳時代前期倭製鏡の流通」『古文化談叢』第50集（上）7-35頁（下垣2011に改筆再録）
- 下垣仁志2011『古墳時代の王権構造』吉川弘文館
- 下垣仁志2013「鏡の保有と「首長墓系譜」」『立命館大学考古学論集』VI 和田晴吾先生定年退職記念論集 立命館大学考古学論集刊行会 189-201頁
- 下垣仁志2018「副葬鏡と被葬者」『古墳時代銅鏡論考』同成社 319-335頁
- 白石太一郎・設楽博己編1994『共同研究「日本出土鏡データ集成」2 —弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成—』国立歴史民俗博物館報告 第56集
- 徐萃芳1984「三国両晋南北朝的銅鏡」『考古』6期 556-563頁
- 鈴木一有2011「横穴式石室」『墳墓構造と葬送祭祀』古墳時代の考古学3 同成社 138-148頁
- 清家章2018『埋葬からみた古墳時代：女性・親族・王権』歴史文化ライブラリー465 吉川弘文館
- 十河良和2003「和泉の円筒埴輪編年概観」『埴輪論叢』第5号 59-91頁
- 辻田淳一郎2011「初期横穴式石室における連接石棺とその意義」『史淵』第148輯 1-36頁
- 辻田淳一郎2012「九州地方出土の中国鏡と対外交渉—同型鏡を中心に—」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』第15回九州前方後円墳研究会 北九州大会発表要旨・資料集 75-88頁
- 辻田淳一郎2014「鏡からみた古墳時代の地域間関係とその変遷—九州出土資料を中心として—」『古墳時代の地域間交流2』第17回九州前方後円墳研究会大分実行委員会 1-26頁
- 辻田淳一郎2018『同型鏡と倭の五王の時代』同成社

- 徳富孔一2017「両晋南朝の方格規矩鏡と日韓の方格T字鏡」『九州考古学』第92号 87-98頁
- 徳富孔一2019「古墳年代からみた日韓出土方格T字鏡十二支帯鏡群の型式学」『考古学研究』第66巻第3号 65-86頁
- 西村俊範1983「双頭龍文鏡（位至三公鏡）の系譜」『史林』66巻1号 95-115頁
- 橋本達也2018「おじょか古墳の副葬品と被葬者像」『おじょか古墳発掘50年記念シンポジウム「おじょか古墳と5世紀の倭」記録集』志摩市教育委員会 29-42頁
- 樋口隆康1979『古鏡』本文 図録 新潮社
- 松浦宥一郎1994「日本出土の方格T字鏡」『東京国立博物館紀要』第29号 179-254頁
- 馬淵一輝2015「(伝)松林山1号墳出土鏡の評価」『松林山1号墳—発掘調査報告書—』磐田市新貝地区土地区画整理組合 磐田市教育委員会 50-57頁
- 森浩一1978「古市・百舌鳥古墳群と古墳中期の文化」『大阪府史』第1巻 古代編I 大阪府 636-751頁
- 森下章司1998a「鏡の伝世」『史林』81巻4号 1-34頁
- 森下章司1998b「古墳時代前期の年代試論」『古代』第105号 1-27頁
- 森下章司2006「喇嘛洞出土の銅鏡をめぐって」『東アジア考古学論叢—日中共同研究論文集—』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 15-22頁
- 森下章司2007「銅鏡生産の変容と交流」『考古学研究』第54巻第2号 34-49頁

遺跡報告・銅鏡図録

(日本)

- 福井・向山1号墳 花園大学考古学研究室編2015『若狭向山1号墳』福井県若狭町
- 三重・おじょか古墳 志摩市教育委員会編2016『おじょか古墳（志島古墳群11号墳）発掘調査報告』金属製品編 志摩市埋蔵文化財調査報告4
- 大阪・塔塚古墳 森浩一・田中英夫1960「大阪府堺市塔塚調査報告—畿内の古式横穴式石室に関連して—」『日本考古学協会総会 研究発表要旨』日本考古学協会第25回総会 9・10頁、浜中邦弘・辻川哲郎・春日宇光・三浦悠葵・奥田尚2020「和泉・塔塚古墳出土遺物報告（1）—同志社大学歴史資料館所蔵品を中心として—」『同志社大学歴史資料館館報』第22号 1-82頁
- 大阪・高月2号墳 森浩一1951「和泉高月古墳調査報告」『古代学研究』第5号 26-31頁
- 大阪・経塚古墳 堅田直2005『大阪・堺市浜寺経塚古墳を写真で読む』堅田考古学研究所（堅田直2006『遺跡から学ぶ』堅田考古学研究所に再録）
- 大阪・大鳥塚古墳 後藤守一1942『古鏡聚英』上篇 秦鏡と漢六朝鏡 大塚巧藝社、藤井寺市教育委員会事務局編2017『古室山・大鳥塚古墳 附章狼塚古墳』藤井寺市文化財報告第41集 古市古墳群の調査研究報告6
- 大阪・カトンボ山古墳 森浩一・宮川徭1953『堺市百舌鳥赤畑町 カトンボ山古墳の研究』古代学叢刊第1冊 古代学研究会
- 大阪・百舌鳥大塚山古墳 樋口吉文編2005『百舌鳥古墳群と黒姫山古墳』堺市博物館
- 奈良・池ノ内1号墳 泉森皎編1973『泉余・池ノ内古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第28冊 奈良県教育委員会
- 和歌山・陵山古墳 橋本市教育委員会編2019『陵山古墳の研究』橋本市教育委員会
- 徳島・巽山古墳 斎藤忠・三木文雄・内藤政恒編1962『石井』吉川弘文館
- 佐賀・横田下1号 大園弘1977『杵島山遺跡調査報告書 付佐賀県下出土の古鏡—弥生・古墳時代—』佐賀県立博物館調査研究書第3集 佐賀県立博物館
- 景元四年芝草紋鏡 五島美術館学芸部編1992『前漢から元時代の紀年鏡』五島美術館
- (中国)
- 北京市密雲区12号西晋墓 北京市文物研究所・密雲区文物管理所2019「北京密雲西晋墓発掘簡報」『中国国家博物館館刊』3期 35-41頁
- 河南宜陽県石村郷馬朝溝村 霍宏偉・史家珍主編2013『洛鏡銅華』上下冊 科学出版社
- 四川金堂県十里村崖墓 龔揚民2018「四川金堂十里村崖墓群」『大衆考古』5期 12-13頁
- 小校経閣金石文字 劉體智1935『小校経閣金石文字』

図出典（図3～5は縮尺不同）

図1 筆者作成

図2 筆者作成

図3 1：藪・史主編2013 170 2：劉1935巻16-27 3：藪・史主編2013 170 4：五島美術館学芸部編
1992 73 5：大園1977 52 6：車崎正彦編2002『考古資料大観』第5巻 弥生・古墳時代 鏡 小学館 112-9

図4 藤田秀臣氏撮影

図5 1：志摩市教育委員会編2016 2：橋本市教育委員会編2019 3：花園大学考古学研究室編2015

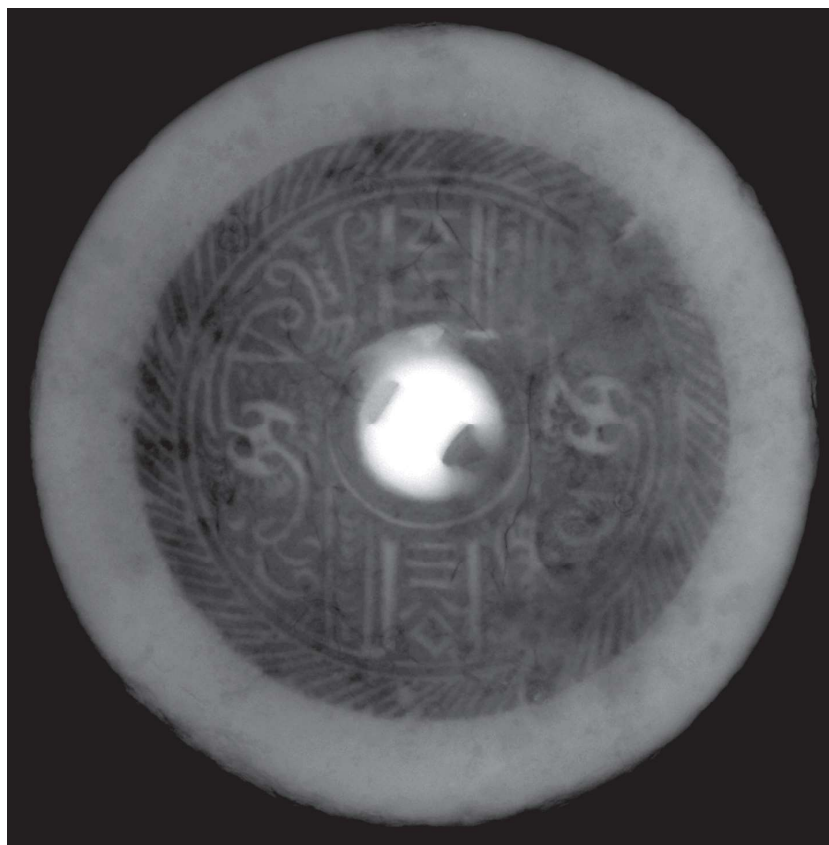


双頭龍紋鏡

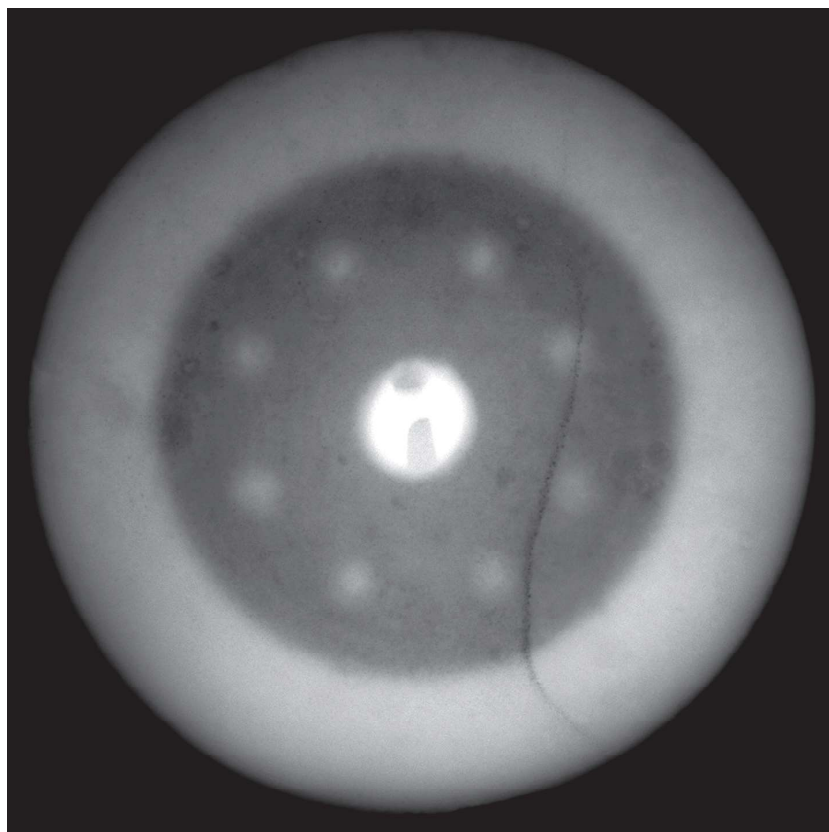


方格T字紋鏡

写真図版 1 塔塚古墳出土鏡

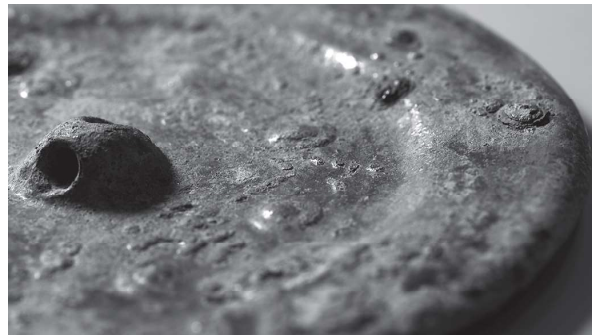


双頭龍紋鏡X線写真



方格T字紋鏡X線写真

写真図版2 塔塚古墳出土鏡



双頭龍紋鏡細部

方格T字紋鏡細部

写真図版3 塔塚古墳出土鏡